新・博多映画街あれこれ㊵

「映画の中の80年代」

松浦　仁

1980年代ってどんな時代だったんだろう。とても早く駆け抜けてしまったような気もするけど。1980年の福博の街。その年にオープンしたのがタワーレコードKBC。巷ではYMOのテクノサウンドなんかが流行っていて。いまじゃCDの時代、外資系のCDショップがあちこちに出現して、小さなレコード屋さんが何軒も消えてしまった。それからDCブランドのブームなんかがあって、スーパーマーケットだったニチイ天神店がビブレ21に替わって、いろんなブランドのショップがはいった。この頃ってみんな高い服ばかり買ってたんだ。西通りにアニエスbや無印良品が出来たのもこのころ。当時の西通り、ちょっと奥に入ると民家ばかりで、お店は少なかった。地下鉄が開通したのも80年代。巨大なディスコ、マリアクラブがオープンして、その通りがマリアストリートと呼ばれていたんだけど、今は夢のあと。親不孝通りも親富孝通りといって、すっかり様変わり。それに、ミニシアターブーム。KBCシネマ北天神とシネテリエ天神が相次いで開館。今日のシネコンブームをだれが予想しただろう。89年のよかトピアに代表されるようなイベント・ラッシュ。ほんと、いろんなイベントが次々にあった。ソラリア、イムズなどの商業ビルが出来て、その後も建設ラッシュ。バブルにはじけなかった元気な街といわれた。今思うと、80年代はとても活気のあった10年、みんなにとってとてもいい時代だったのかもしれない。

最近、80年代を描いた映画をたくさん見た。その雰囲気が、なんだかとても懐かしいような。「アメリカン・サイコ」は、80年代のニューヨーク、ウォール街の証券会社で働くヤッピーの話。27歳の主人公は、とてもリッチな生活をしている。高層マンションに住み、ブランドのスーツを着こなし、夜ごと高級レストランに通う。もちろん、支払いはプラチナカード。まさに完璧な生活、80年代のアメリカン・ドリーム。でも、そんな物質に満たされた生活のなかにも、なにか満たされないものを感じはじめて、やがて狂気と妄想の世界へ。浮浪者をいたぶるところなんか、まるで「時計じかけのオレンジ」のアレックス君みたい。これは70年代の映画だったが。で、「アメリカン・サイコ」。猟奇的な殺人がどんどんエスカレートしていくんだが、それは現実の世界じゃなかったりして…。まるでごく日常の世界に悪魔が降りてきたような話。

悪魔じゃなくて、天使がほんとうに降りてきたのが「天使のくれた時間」。ニコラス・ケイジが演じる主人公は、ニューヨーク、マンハッタンの大手金融会社の社長で、優雅な独身生活を満喫している。まさに「アメリカン・サイコ」と同じ設定だ。でも、その成功は13年前の1987年に恋人と別れてロンドンに行ったことによる。クリスマス・イブの日、ひょんなことから天使に出会う。天使といっても姿は、コンビニストアの店員に銃を突きつける黒人の青年だ。天使は言う。「これから起こることは、あんたが招いたことだ」。翌朝、ある郊外の家のベッドの中で目が覚める。13年前に別れた恋人と家庭を持っていて、2人の子供がいる。マイホームのローンに追われ、生活費を切りつめているごく普通の中流の暮らしは、今までの超高層マンションの独身生

額縁・洋画材料・デザイン用品
大崎周水堂
(271)1696

贈ります。博多の心。―
博多人形
博多織
増屋
博多上川端商店街☎(281)0083番
天神地下街店☎(771)1070番

博多石焼
大阪屋
創業大正15年
郷土料理
Japanese Restaurant
福岡市博多区中洲5丁目3－16　☎(291)6331
営業時間 午前11時半～午後10時

活とはほど遠い。でも、(かつての愛を取り戻した)妻と(最初は苦手だったがだんだん愛情が深まっていく)子供たちとの生活は、13年前に棄ててしまったもうひとつの人生。それも悪くないことに気づく。何不自由ない生活を送っている人間が、悪の世界へと引き込まれる「アメリカン・サイコ」、そしてもうひとつの違った人生を垣間見せる「天使のくれた時間」。なんだかとてもよく似ている。

天使といえば「ミリオンダラー・ホテル」。監督は、「パリ、テキサス」「ベルリン・天使の詩」のヴィム・ヴェンダース。まるで80年代に製作されたこれらの映画の続編みたいだ。「パリ、テキサス」は、荒野を貫くハイウェイ、街から街へと車で旅をするロード・ムービーだが、こちらはホテルの中で繰り広げられる密室劇。まるでロード・ムービーに対するヴェンダース自身の反動であるかのような作り方。「ベルリン・天使の詩」では、天使が人間になるために地上に落下するが、「ミリオンダラー・ホテル」でも主人公がホテルの屋上から落下して、たぶん天使になったのだろう。それに、コルセットをつけたFBIの捜査官(メル・ギブソン)は、羽をもぎ取られた天使に違いない。

「DOWN TOWN 81」は、グラフィティ・アーティストとして知られるバスキアが駆け抜けた1981年のニューヨーク・ダウンタウンの街角をピックアップしている。撮影は当時おこなわれていて、バスキア自身が主演している。時を越えた2000年の編集が当時の街並み、空気、そしてアートや音楽シーンをテンポよく伝えていて、80年代という時代を実感させてくれる。

それでは日本の80年代。「LOVE SONG」は、1985年の北海道から始まる。尾崎豊のLPレコードを巡る淡いラブストーリーだ。同じく80年代から始まる香港の映画に「ラヴソング」というのがあった。どうしても比べてしまう。こちらは、テレサ・テンの曲をもとにしていて、本人が登場するわけではないが、とても重要な役割を演じている。一方、「LOVE SONG」の方は出会いのきっかけが尾崎豊のLPレコードで、それほどの存在感はない。要は女子高生がレコード屋のお兄さんから尾崎豊のレコードを借りぱなっしにしていて、2年後に東京で返すという、青春の忘れ物みたいな映画。「ラヴソング」は、終盤から時を追ってこれでもかこれでもかというふうにすれ違うレオン・ライとマギー・チャンが、10年の年月を経てようやく劇的な出会いを果たすのだが、そのきっかけもテレサ・テンを映し出している電気屋のテレビだった。なんだか、「ラヴソング」がこってりした湯麺なら、「LOVE SONG」はとても淡泊な日本蕎麦といったところ。

そして、「山の郵便配達」。1980年代の始め、中国のある山岳地帯。父は、2泊3日で120キロの山道を歩いて村々に郵便を配達している。1日休んでまた出かける。そんな生活を20年以上も続けてきたが、退職してその仕事を息子に譲ることにした。父にとっては最後、息子にとっては最初の郵便配達にともに出かける。そのいつもどおりの2泊3日の父子といっても連れだった犬との旅を描いている。ただそれだけなんだが、そこに父の人生を集約させ、父の仕事を引き継ぐ息子の心と、主人が代わる犬の愛らしさまでも綴っている。80年代の中国、山岳地帯といっても大きな道もあるし、バスも走っている。それでも歩く方が確実だと息子を諭す父。映像に嘘がない。たぶん、今日の映画ならたいてい使っているデジタルとかコンピュータ処理とかそんなものを一切使ってないんだろう。だからこそみんなを感動させることができるような気がする。

「LOVE SONG」の1985年のレコード屋。2年後には、店頭にレコードに代わってCDが並んでいた。時は、どんどん過ぎ去っていく。80年代ってもう20年も前のことなんだ。

朱鷺かまど
てら岡本店三階
☎(731)6030